

---

# 君を追いかけて

蒼葉 樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君を追いかけて

### 【Nコード】

N5489A

### 【作者名】

蒼葉 樹

### 【あらすじ】

仲の良かった幼なじみが弁護士になるため、留学してしまう。そのことを、彼の部屋で見つけた一通の手紙で知る事になる。

君が、遠く離れて行きそうなのは、気付いてた。  
夢を叶える為、だよな。

僕はその夢を叶える手伝いは、出来ないのかな。  
君と、これから先もずっと、離れたくないんだ。

今までいつも、一緒だったんだ。

僕と君は、幼なじみだからね。

君がいなくなるなんて、こんなに淋しいことは無いだろう。

僕は多分しつこいから、ずっと君を追いかける。

君なら、分かるよね。僕のことなら。

\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*  
\* \*

君の夢、聞かせてくれたことは無かった。  
だけど、僕は見つけてしまったんだ。君宛に送られて来た、一通の  
手紙を。

君の家に、いつもの様に遊びに行っていた時。

プルルルルルル……

「しんけい」  
洸輝の電話が鳴る。

「ごめん、ちょっと待ってて」  
「ああ」

洸輝は部屋を出て行った。  
扉が閉まる。その反動で、ベッドの脇から何かが落ちた。

細長い、一通の手紙。  
送り主は僕の先輩からだった。

その先輩は、僕の中学時代の同じサッカー部の先輩。  
今は弁護士をしている。  
いつの間に洸輝と知り合ったのか。

落ちた拍子に、その手紙は読んでくれとばかりに二つ折りが開かれていた。  
洸輝はまだ戻っては来ない。電話の相手が知り合いだったのだろうか。

それを良い事に僕は手紙を拾い上げ、読んだ。

手紙には、僕には一言も言ったことの無い、彼の夢について書いてあった。

洸輝は弁護士になりたいのだという。その為に昔から勉強に励んでいたのか。  
彼は勉強熱心だった。何の為かは僕に話してくれたことはない。  
この先もきつと、言わないだろう。それが、洸輝だから。

手紙によると、洸輝は弁護士の資格を取る為、留学したいのだと言

う。

留学なんていったら、もう僕とは会えなくなる、という事になる。こんな大事な事、本人の口から聞いたかった。

それでも僕は彼のこと、認めてしまふのだろう。

僕は昔から洸輝に甘いから。自分の性格に呆れる。

それから何週間経った或る日。

洸輝の家で、もう一通の手紙を見つけた。

送り主は又もやあの先輩。

手紙はしまい忘れたのか、机の上に開いて置かれたままになっていた。

洸輝がいない間にそれを読む。

留学することが決まったらしい。あと一年でいなくなる。

僕は将来、彼の助手でも何でもしてやると決めた。

もちろんこの事は洸輝には秘密だけれど。

洸輝が留学の事を何も言わないまま、もう一年が過ぎようとしていた。

洸輝はこのまま黙って行ってしまうのだろうか。

そんなのは許せない。行く前に聞いてやる。

僕は彼に電話をかける。

「もしもし、俺だけど、今良いか？」

「え…今？今は、ちょっと…」

やっぱりもう留学の準備をしていたか。

「何か用でも有るの？」

逆に聞き返された。用？もちろん、有るさ。

「聞きたい事が有って。今から行っても良いか？」

「あ、ごめん。家は無理…。じゃ、外で会おう」

「分かった。その公園で」

「うん、今から行くよ」

彼は少しためらいながら、そう答えた。

公園に一人の男が顔を出す。

ベンチに座る僕は手を挙げて居場所を告げる。

洸輝を僕の横へ座る様、促す。

「時間が無いから、聞きたい事だけ聞くよ」

「うん、何？」

「洸輝、お前、留学するんだろ？」

「え…何言って…」

「悪いけど、知ってるんだ。部屋で手紙見ちゃって」

「そうだったんだ…」

俯いて黙り込む洸輝。

「先輩と知り合いだったんだな」

「まあね」



「10時30分着。間もなく参ります」

僕のいる空港で、アナウンスが告げられる。  
もうすぐあいつが帰って来る。

僕の元に一人の男が駆け寄ってくる。  
そいつは僕に向かって大きく手を振って来た。  
僕も大きく振り返す。

「ただいま！」

「おかえり！待ってたよ、洸輝」

「うん。ありがとう」

一カ月後。

ブルルルルルル……

一本の電話が入る。

「お電話有難うございます。神谷弁護士事務所です」

「あの、依頼をしたくお電話差し上げました」

電話は、事件の依頼。

「では、後日こちらへお越し下さい」



ここは、洸輝と僕の、弁護士事務所。

E  
N  
D

（後書き）

何となく書いてたらこんなのが出来ちゃいました（；´・｀）  
友情物は初めてだったんで良く出来てるかは不安なのですが…”

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5489a/>

---

君を追いかけて

2011年1月30日02時47分発行